

『旧桜橋財団関係資料』の翻刻と京都桜橋財団の設立 —『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(六)—

下 川 雅 弘*

Introduction to Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) for the Study of Kyoto-kanke-shizoku (VI)

Masahiro SHIMOKAWA*

Abstract

The term Kyoto-kanke-shizoku refers to the low-level functionaries who served in the Imperial Court until 1869. They became unemployed and impoverished as a result of the Meiji Restoration. The organizations Heian-gikai and Kyoto-Ohkitsu-zaidan were founded to support them. Heian-gikai Siryo (the Historical Materials of the Heian-gikai) and Ohkitsu-zaidan Siryo (the Historical Materials of the Ohkitsu-zaidan) are the materials handed down from generation to generation in these organizations. In 2016, these materials were donated to the Kyoto Institute, Library and Archives. This text was written to introduce them for being used in the study on the Kyoto-kanke-shizoku.

はじめに

本稿は、近世以前において朝廷に出仕していた官家士族について、その近代以降の動向の解明に資するため、京都府立京都学・歴史館所蔵『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の一部を、逐次翻刻・紹介することを目的としている。⁽¹⁾ その(六)となる今回は、同史料群のなかから、とくに京都桜橋財団の設立に関する史料を取り扱う。

京都桜橋財団については、すでに指摘したとおり、松田敬之氏がその論文⁽³⁾のなかで、「旧京都官家士族の親睦団体である平安義会・京都桜橋財団」とわずかに触れられている以外、この団体に言及した先行研究は、管見の限り存在しないと思われる。そこで、旧稿⁽⁴⁾では、平安義会の二代目会長である尾崎三良後年の自叙伝より、「桜橋団のこと」の項を全文引用し、京都桜橋財団は、帝室より下賜された二十万円を基に、広く官家士族全般を対象として困窮者を賑恤するために設立された団体で、京都在住の官家士族を対象に限った平安義会とはその性質を異にすると、尾崎が述べていることを紹介した。この叙述については、本稿で明らかにするとおり、おおむね事実を伝えていると判断できるが、『尾崎三郎自叙略伝』のうち京都桜橋財団について触れたその他の箇所には、この史料が尾崎後年の叙述というところもあり、いくぶん不正確と思われる情報も含まれている。

そこで、本稿では、明治四十二年(一九〇九)から昭和四十二年(一九六七)までの二五 points の史料が収められた、『旧桜橋財団関係資料』の一部を翻刻・紹介し、明治四十二年前後における京都桜橋財団の設

立過程やその性質について、あらたな情報を提供するとともに、その詳細を明らかにしたい。なお、翻刻に当たっては、原則として旧字を新字に改めている。

一 本稿で翻刻・紹介する資料の解題

(一)の「京都府知事大森鍾一宛宮内大臣官房総務課第一七〇号」は、文書番号二一「旧官家士族其他調査一件綴」に収められた書類の一つである。明治四十一年(一九〇八)五月二十日に、宮内大臣官房総務課長近藤久敬が京都府知事大森鍾一に宛てた依頼文の写しで、旧官家士族の範囲などについて質問している。

(二)の「宮内大臣官房総務課長近藤久敬宛京都府知事大森鍾一回答案伺」も、文書番号二一「旧官家士族其他調査一件綴」に収められた書類の一つである。明治四十一年九月十四日に、大森知事が近藤に宛てた回答書案の写しで、(一)の質問に対し「地下官人階級調」等を添えて回答している。

(三)の「地下官人階級調」も、文書番号二一「旧官家士族其他調査一件綴」に収められた書類の一つである。(二)の回答書に添えられた「地下官人階級調」の写しと考えられる。

(四)の「桜橋財団設立準備事務委嘱書」は、文書番号一七「京都桜橋財団関係文書一括」に収められた書類の一つである。明治四十二年(一九〇九)八月十六日に、大森知事が谷森真男等三十三名に京都桜橋財団設立準備事務を委嘱したもので、(六)の御沙汰書とともに封

筒に入れられている。⁽⁶⁾

(五)の「宮内書記官栗原広太宛京都府知事大森鍾一書翰案」は、文書番号二一「旧官家士族其他調査一件綴」に収められた書類の一つである。明治四十二年十二月二十三日に、大森知事が宮内書記官栗原広太に宛てた書翰案の写しで、旧官家士族の範囲について報告している。

(六)の「桜橋財団資金下賜御沙汰書」は、文書番号一七「京都桜橋財団関係文書一括」に収められた書類の一つである。明治四十二年十二月二十九日に、宮内省が京都桜橋財団に二十万円の下賜を伝達したもので、(四)の委嘱書とともに封筒に入れられている。

(七)の「多田好問京都出張日記」は、文書番号一八「本団設立ニ係ル諸氏請求書」に収められた書類の一つである。宮内省御用掛で東京在住の多田好問⁷⁾が、明治四十二年三月からの京都桜橋財団設立準備に関する要務の大綱、とくに同年八月より十二月における京都出張の大要を、記憶を頼りに筆記した日誌で、明治四十三年(一九一〇)六月二十二日に、京都桜橋財団調査委員宛てに提出されている。

二 史料の翻刻

(一)「京都府知事大森鍾一宛宮内大臣官房総務課第一七〇号」

(本書)
宮内大臣官房
総務課 第一七〇号

旧官家士族職掌ノ儀ニ付、昨四十年十二月三日附宮内大臣へ御内申相

成、目下御詮議中ニテ、固ヨリ成否未定ニ候得共、該御取調ヲ以テ、曩ニ一同ヨリ提出候名簿ニ対校スレハ、別紙ノ通ニ有之候処、自然名簿ニ脱漏等有之間敷哉、且右名簿中ニハ維新ノ際、卒平民籍ニ入り候向モ有之趣ニ相聞へ、果シテ然ラハ単ニ旧官家士族ト称シ候ハ不得、其実様ニモ被存候、就テハ如何様ノ名称ヲ用テ、御申出ノ種類一切ヲ包含総括シ可然哉、右ハ自然他日重複又ハ脱漏等ノ物議有之候テハ不都合ニ付、篤卜御取調至急御回報有之度、依命別冊名簿相添此段及照会候也、

明治四十一年五月廿日

宮内大臣官房

総務課長近藤久敬

京都府知事大森鍾一殿

(二)「宮内大臣官房総務課長近藤久敬宛京都府知事大森鍾一回答案伺」

明治四十一年九月十四日

知事

宮内大臣官房総務課長

回答案伺

案

予テ出願ニ係ル旧官家士族其他ニ関スル名簿精密調査方、本年五月廿日付ヲ以テ云々御照会之趣、了承取調候処、別冊地下官人階級調脱漏

明細書、及ヒ地下官人階級調ノ通、相違無之、而シテ維新ノ際、卒平民籍ニ入リタルモノ等ニ対シ、総括シタル名称ニ付テハ、旧官家士族及ヒ旧地下ノ輩ト称シ候方、可然ト存候間、右様御承引宜敷御詮議相成候様致度、別冊相添ヘ此段及回答候也、

年 月 日

長官名
総務課長近藤久敬殿宛
親展

〔三〕「地下官人階級調」

(表紙)
一

地下官人階級調

一	六位以上	八百三十一家
一	但神祇官一家、兩局二家、既列華族者除之、	
一	七位以下及衛府、番長、使番	二百十一家
一	使部以下雜役	六十四家
一	仕丁	三百五十六家
	計千四百六十二家	
一	伏見宮殿上人	一家

右初叙從五位下進至正四位下

一 六位藏人 三家

右小森典葉代々補之、維新之際、藤島、細川兩家亦現在其職、

一 神祇官 七家

右初叙從五位下

一 檢非違使 六家

右初叙正六位上特進正四位下

一 出納 一家

右初叙正六位上進至正四位下

一 内豎^(監) 一家

右初叙正六位上進至從四位上

一 上御倉 二家

右初叙正六位上進至從四位下

一 内舍人 旧家二家

右初叙正六位上進至正五位下

一 陰陽寮 二家

一 宮及撰家諸大夫 五十七家

右初叙正六位下特進從三位

一 樂人 五十七家

右初叙正六位下特進正四位上

一	門跡寺院坊官	五十五家	一	右初叙正六位下進至從五位下	
一	門跡寺院諸大夫	四十六家	一	内舍人 <small>新</small> 家	三十二家
一	主殿寮	二家	一	滝口	三十五家
一	右初叙正六位下進至正四位下		一	右初叙正六位下進至從六位上	
一	典藥寮	二家	一	清華家諸大夫	三十六家
一	右初叙正六位下特進正四位下		一	右初叙從六位上特進從三位	
一	内膳司	一家	一	画所預	二家
一	御所厨子所預	一家	一	右初叙從六位上進至正四位下	
一	後院庁官	一家	一	典藥寮 <small>醫師</small>	四十三家
一	内豎 <small>林</small> 家	一家	一	右初叙從六位上進至正四位上	
一	右初叙正六位下進至從四位上		一	内藏寮 <small>兼造酒司</small>	一家
一	外記	三家	一	図書寮	二家
一	史	四家	一	掃部寮	二家
一	御藏小舍人	四家	一	大膳職	一家
一	兵庫寮	一家	一	右初叙從六位上進至正五位上	
一	右初叙正六位下進至從四位下		一	大政官史生	二家
一	藏人所衆	九家	一	右初叙從六位上進至從五位下	
一	右初叙正六位下特進從四位下		一	大臣家諸大夫	七家
一	行事官	一家	一	北面	二十一家
一	院所衆	四家	一	右初叙從六位下進至正四位下	
一	右初叙正六位下進至正五位下		一	主水司	一家
一	左馬寮	一家	一	右初叙從六位下進至正五位下	
一	右馬寮	一家	一	近衛府	四十二家

一	右初叙從六位下特進正五位下	
一	御厨子所番長	一家
一	御厨子所小頭	一家
一	大舍人寮	四家
一	行在所	一家
一	右初叙從六位下進至從五位上	
一	縫殿寮	三家
一	官掌	四家
一	大仏師	一家
一	院承仕	一家
一	絵所	一家
一	宮及諸家侍	百二十二家
一	門跡寺院侍	八十一家
一	侍法師	三家
一	門跡寺院上北面	二家
一	文殿	一家
一	右初叙從六位下進至從五位下	
一	陳官人 ^(神)	二家
一	召使	四家
一	右初叙從六位下進至正六位上	
一	式部省	一家
一	生火官人	一家
一	院召使	三家

一	院召次	一家
一	後院召使	一家
一	後院召次	一家
一	院雜色	五家
一	主殿寮官人	二家
一	右初叙從六位下進至正六位下	
一	諸陵寮	一家
一	右初叙從六位下	
一	非藏人 ^{旧家六十二 新家十八}	八十家
一	右准六位	
	(朱世) 計八百三十一家	
外	神祇官河辺家、兩局壬生家、押小路家、三家既被列華族方除之、	
一	陰陽寮 ^{陰陽師}	六家
一	右初叙正七位下進至從五位下	
一	木工寮官人	一家
一	内藏寮官人	三家
一	右初叙正七位下進至從六位下	
一	贊者	二家
一	右初叙正七位下進至從六位上	

一	弁侍	二家
一	少納言侍	二家
一	中務省史生	二家
一	式部省史生	二家
一	大藏省史生	二家
一	大膳職史生	二家
一	大舍人史生	二家
一	内藏寮兼造酒司史生	二家
一	縫殿寮史生	二家
一	大炊寮史生	二家
一	掃部寮史生	二家
一	兵庫寮史生	二家
一	内匠寮史生	二家
一	諸陵寮史生	二家
一	木工寮史生	二家
一	主殿寮史生	四家
一	図書寮史生	三家
一	典藥寮史生	二家
一	造酒司史生 <small>兼酒部</small>	二家
一	主水司史生 <small>兼酒部</small>	二家
一	内膳司史生	二家
一	右初叙正七位下進至從六位下	
一	衛士 <small>藤井家</small>	一家

一	陰陽	一家
一	右初叙正七位下	
一	戸屋主	一家
一	右初叙從七位下進從七位上	
一	下南座	一家
一	内膳司膳部	五家
一	右初叙從七位下	
一	近衛府番長	十一家
一	使番	百三十二家
 (末世) 計二百十一家		
一	使部	十九家
一	仕人	三家
一	釜殿	四家
一	衛士	三家
一	檢非違使下司	一家
一	総官職	一家
一	兵庫寮鼓師	一家
一	同鉦師	一家
一	御香水役人	二家
一	幡鉦	一家
一	駕輿丁左近府兄部	一家

(四)「桜橋財団設立準備事務委嘱書」

一	左近府沙汰人	一家
一	駕輿丁右近府兄部	一家
一	右近府沙汰人	一家
一	駕輿丁左兵衛府兄部	一家
一	駕輿丁右兵衛府兄部	一家
一	御車童子	二家
一	御車副	九家
一	御車舍人	四家
一	御車棧持	一家
一	御車榻持	一家
一	掛竿持	一家
一	鑑取	二家
一	右近府鼓師	一家
一	同鉦師	一家

(朱書)
計六十四家

一 口向仕丁
三百五十六家

(朱書)
計三百五十六家

合 千四百六拾二家

谷森真男
多田好問
羽倉信可
藤木経立
青木行方
石川礼興
勢多章之
伊藤朝往
畑 道名
水口卓哉
小森猷次
六角敦陳
大町 力
大隅正経
若杉保定
浅井国順
下橋敬長
井関次郎
菅谷寛三
小島秀次郎
伊藤倫之

左右田忠太郎

岩橋元柔

松室信輝

服部保親

増沢季の

川口珍邦

生駒山国

吉野久和

下間頼世

上原芳太郎

嶺 全明

小谷時中

明治四十二年八月五日、甲第二九一号宮内大臣御達ノ旨ニ依り、財団法人設立ニ関スル準備事務取扱ヲ委嘱ス、

明治四十二年八月十六日

京都府知事大森鍾一

〔五〕「宮内書記官栗原広太宛京都府知事大森鍾一書翰案」

栗原書記官へ書翰案

拝啓、寒冷之候、益御清適奉賀候、陳ハ先般当地御来京之節、昌谷事務官へ御内談有之候、旧官家士族人名中、雑掌包含之有無ニ付、遂調査候処、右ハ最初御照会当時、本府ニ於テ調査シタルモノハ、総名旧

官家士族ト称スルモ、地下官人及非藏人、口向士ノミニ止り、其以外ノ官家士族（雑掌ヲモ包含ス）ハ、全ク之レヲ省キタルモノニ有之候、元来御内議之雑掌ナルモノニ二様アリテ、宮、摂家、清華家、大臣家、諸堂上、及門跡、比丘尼寺等之家士ニシテ雑掌勤仕ノモノハ、概ネ本職タル地下官人ヨリ、平常其家ニハ兼勤ノ向有之、夫レ等ノ者ハ、各本職タル名称ニ従ヒ、曩ニ進達セシ地下官人階級調人名簿中ニ記載シアルモ、單純雑掌ナル者、及ヒ名称ハ雑掌ニアラサルモ、身分ニ於テハ雑掌以上ノモノモアリ、又以下ノモノト雖トモ、下職ヨリ順次累進スルモノニ有之、勿論此等ハ官家士族中ニ包含セシムル方、穩当ニ有之候、其内民籍ニ移籍シタルモノハ除名候、将又曩ニ提出ノ人名簿中末尾ニ、仕丁ナルモノアルモ、右ハ卒ヨリ士族ニ編入セラレタルモノニ付、加入存置候、之ヲ要スルニ一般官家士族ト称スルトキハ、右等ノ如キ者ヲ總テ包含セシメラル方、後日紛擾ヲ来ス憂モ無之、穩当ノ処置ト存候ニ付、則今回、宮、摂家、清華、大臣家、諸堂上方、門跡、比丘尼寺等ニ勤仕セシモノ、人名、全部取調之上、御手元へ差出之間、可然御措置相成候様致度、此如得貴意候、敬具、

明治四十二年十二月廿三日

京都府知事大森鍾一

宮内書記官栗原広太殿

〔六〕「桜橋財団資金下賜御沙汰書」

京都桜橋財団

一 整理公債証書額面金貳拾万円

右旧官家士族及旧地下ノ輩

御恵恤ノ

思召ヲ以テ、其財団資金トシテ下賜候條、教育賑救ノ資ニ充ツヘキ旨、御沙汰候事、

明治四十二年十二月二十九日

宮内省

〔七〕「多田好問京都出張日記」

明治四十二年八月ヨリ十二月ニ至ル間、京都出張中ノ日誌差出可申様御請求ノ処、従来好問ハ公事私務ヲ問ハス、日誌ヲ作りタルコト無シ、因テ御請求ニ応スル能ハス候、但當時取扱タル要務ノ大綱ヲ筆記シ、御参考マテニ差出申候也、

明治四十三年六月廿二日

多田好問（印）

京都桜橋財団

調査委員御中

明治四十二年三月

是月中旬大森知事ヨリ、昨年以來屢御内談ニ及ヒ置タル宮内省ヨリ旧

官家士族へ御下賜金之儀ニ付、今回宮内大臣ヨリ御内意之趣旨ヲ伝ヘラレタルヲ以テ、本官ハ旧官家士族へ内々諭達致ス可キニ依リ、好問ニ京都出張アリタシト来信アリ、好問ハ二月中旬ヨリ京都ニ於テ病ニ臥シ、是月上旬帰東シ、尚療養中タルヲ以テ、出張スルコト能ハサル旨ヲ回答シタルニ、大森知事ハ電信ヲ以テ、強テ出張ヲ促サレタルモ、汽車ニ搭スルコト困難ナルニ依リ、不本意ナカラモ出張シ難キ旨ヲ電答セリ、其後大森知事ヨリ在京都ノ旧官家士族ノ一部分ヲ府庁ニ召集シ、宮内大臣御内意ノ趣旨ヲ諭達シタルニ依リ、在東京ノ旧官家士族ニハ、好問ヨリ内達ヲ取計呉レト来信アリ、因テ好問ハ谷森真男氏、青木行方氏、羽倉信可氏ト協議シ、各其手寄りヲ以テ、右内達ヲ取計タリ、

同年八月

大森知事ヨリ宮内省御下賜金之御達アリタルヲ以テ、公然ト旧官家士族ニ相達ス可キニ依リ、在東京ノ旧官家士族総代ノ心得ニテ、好問其他一兩名、京都出張アリタシト来信アリ、

是時好問ハ背部ニ癱ヲ発シ、療養中タルニ依リ、谷森真男氏、青木行方氏、羽倉信可氏ニ京都出張ヲ請求シ置キ、大森知事ニハ疾病ニ依リ出張シ難キ旨ヲ回答シタルニ、大森知事ハ電信ヲ以テ強テ出張ヲ促サレ、又谷森、青木両氏ヨリモ出張ヲ勧告セラル、ヲ以テ、好問ハ疾病ヲ力メテ上途シ、羽倉信可氏ト同伴京都ニ出張シタリ、

大森知事ハ在京都ノ旧官家士族ノ一部分ト好問及羽倉氏ヲ府庁ニ召集セラレ、宮内大臣御達ノ趣旨ヲ伝達セラレ、而シテ財団設立準備事務

取扱ヲ委嘱セラレ、寄附行為案ヲ附与セラル、

因テ好問ハ諸員ニ代リ、御請ノ旨ヲ大森知事ニ奉答シ、而シテ在京都ノ準備事務取扱員ト、寄附行為案ヲ討議シ、其座長ノ席ニ就キ、議事ヲ整理シ議決之上、修正案ヲ具ヘテ大森知事ニ答申セリ、

又好問ハ在京都ノ準備事務取扱員ハ、旧官家士族一般ヨリ委任状ヲ徵スルコト、其他ノ諸手續ヲ協議セリ、

又元両本願寺ノ家来ノ中ニ於テ、元卒云々ノ名称ニ就キ、一場ノ紛議起リテ、大森知事ニ陳情書ヲ内申スルコト有リテ、甚不穩ノ状ヲ見ハス、好問數回其重立チタル人々ト面議シテ、其紛議ヲ解決スルコトニ斡旋シタリ、

又好問ハ大森知事、昌谷事務官ト數回府庁又ハ其邸宅ニ於テ面晤シ、財団設立ニ関スル要件ヲ協商セリ、

以上ノ事項ニ就キ、他ト交渉スヘキ廉々ハ、略結了シタルヲ以東歸シ、在東京ノ準備事務取扱員ト諸事協議シ、当分ノ内、谷森真男氏ノ宅ヲ以テ仮事務ト為シ、時々集会協議スルコトニ決定セリ、

同年九月

好問ハ他ノ要務ヲ以テ京坂地方ニ出張シタルニ依リ、其使ヲ以テ大森知事、昌谷事務官ト數回府庁又ハ其邸宅ニ於テ面晤シ、在東京ノ旧官家士族中ノ某々等カ唱道スル所ノ事情ヲ縷陳シ、且元近衛家ノ家来某々カ御下賜金固辭ノ書面ヲ差出シタル事、元輪王寺宮ノ家来加入申出ノ事、維新ノ際典藥寮医師ニ召加ラレタル伊東、横山両氏ノ事、旧刑法ニ触レ除族セラレタル家ノ事、帰農歸商シタル家ノ事、又目今住

所不明ノ家ノ事等ニ就キ、其取扱方ヲ協商スル所アリ、又小森猷次氏、水口卓哉氏ニモ、旧官家士族一般ヨリ委任状ヲ徵スル事ニ就キ、協議スル所アリタリキ、

同年十月

在京都ノ準備事務取扱員ヨリ内務大臣へ、財団設立認可出願ノ件、及在東京ノ旧官家士族ヨリ徵シタル委任状ノ件ニ就キ、照会アリタルヲ以テ、羽倉信可氏、石川礼興氏、伊藤朝往氏、京都ニ出張セラル、好問ハ三氏ニ先テ上途出張シタリ、

是ヨリ先キ、在東京ノ準備事務取扱員ハ、寄附行為案ヲ熟読シ、其不完全ノ條項ヲ修正増補シ、之ヲ在京都ノ準備事務取扱員ニ附シテ、再議ヲ請求スヘシト議決シ、好問修正案ヲ草シ、河村讓三郎氏、富井政章氏、之ヲ潤色セリ、

因テ好問ハ其修正案ヲ携帶シテ京都ニ出張シ、大森知事、昌谷事務官ニ呈シテ修正ヲ加ヘタル理由ヲ縷陳シ、在京都ノ準備事務取扱員ノ再議ヲ請求スルノ旨ヲモ陳述シテ、其同意ヲ乞ヒタリ、而シテ小森猷次氏、水口卓哉氏、吉野久和氏ニ、其修正案ヲ在京都ノ準備事務取扱員ノ再議ニ附センコトヲ請求シタリ、

是時好問ハ内閣総理大臣ヨリ、伊藤公爵国葬御用アルヲ以テ帰東スヘシトノ電命ニ接シ、直ニ東歸セリ、

翌十一月ニ至リ、好問ハ伊藤公爵国葬御用モ一段落ヲ告ケタルヲ以テ、再ヒ京都ニ出張セリ、

而シテ在京都ノ準備事務取扱員ハ、寄附行為修正案ヲ再議スルコトニ

同意セラル、ヲ以テ之ヲ討議シ、好問説明員ノ任ヲ担フ、議決ノ上更ニ修正ヲ加ヘタル條項ヲ整頓シ、之ヲ大森知事ニ呈シテ、採用セラレシコトヲ請求シタリ、

又好問ハ在京都ノ準備事務取扱員ト、内務大臣ニ出願ノ手續、及旧官家士族ノ名簿調製ノ方法等ヲ協議セリ、

又好問ハ大森知事、昌谷事務官ト数回面晤シ、財団設立及設立後ニ関スル要件ヲ商議セリ、

以上ノ事項ニ就キ、他ト交渉スヘキ廉々ハ、略結了スルヲ以テ東帰ス、右ハ好問カ胸中ニ記憶スル所ノ大要ヲ筆記ス、

おわりに

本稿で翻刻・紹介した史料から、あらたに得られた京都桜橋財団の設立に関する知見を整理することで、結びとしたい。

(一)の「京都府知事大森鍾一宛宮内大臣官房総務課第一七〇号」の冒頭に、「旧官家士族職掌ノ儀ニ付、昨四十年十二月三日附宮内大臣へ御内申相成、目下御詮議中ニテ、固ヨリ成否未定ニ候得共」とあることから、京都桜橋財団の設立による旧官家士族の救恤に向けて、すでに明治四十年(一九〇七)十二月三日には、宮内大臣への内申がなされ詮議中であったことが確認できる。こうした京都桜橋財団の設立に向けた動きは、以下に引用する『尾崎三郎自叙略伝』⁽⁸⁾の叙述のとおり、さらに遡って明治三十四年(一九〇一)以前から存在していたようである。

(明治三十四年)四月十四日、官家士族総代畑道名、水口卓哉、西村世亨、岩橋元柔、隠岐広業等来る。過日來内談ありし宮内大臣への願書、即ち官家士族救恤金下賜に関する請願書に二条、鷹司、三条三公、久我侯、東久世伯、長谷子等、奥書連署捺印の書面を持来る。依つて之を田中宮内大臣へ呈出し、其後交渉を重ね、明治四十年に至り、漸く官家士族救恤資金として金二十万円の下賜あり。之を基本として桜橋財団なる財団法人を組織し、現に之を以て官家士族子弟の教育費を補助し、傍ら同鰥寡孤独を救恤するの資金と為せり。

この叙述は『尾崎三良日記』⁽⁹⁾同年同月日条の「旧官家士族惣代畑道名、西村世亨、岩橋元柔、隠岐広業來ル、官家士族名簿五冊、参考書共六冊持參、二条、鷹司、三条三公、久我侯、東久世伯、長谷子等ノ認印ヲ捺シ來リ、猶宮内大臣へ進達ヲ乞フナリ」との記載に基づいて書かれており、官家士族名簿等を持參した畑道名をはじめとする一部の官家士族たちが、明治三十四年の段階で官家士族救恤金下賜に関する請願を要求し、これに応じた尾崎三良が宮内大臣田中光顯と交渉を重ねていたことは確かであろう。

ただし、「明治四十年に至り、漸く官家士族救恤資金として金二十万円の下賜あり」との叙述については疑義がある。二十万円の下賜について、明治四十年の段階ですでに詮議がなされていた可能性はあるものの、(六)の「桜橋財団資金下賜御沙汰書」のとおり、宮内省より正式に下賜金が認められたのが、明治四十二年(一九〇九)十二月

二十九日であることは間違いないからである。

そこで、本稿で翻刻・紹介した(一)から(七)の史料により、明治四十二年に二十万円が下賜される背景や、京都桜橋財団が設立される経緯について、その実態を明らかにしていきたいが、まずは設立後すぐの明治四十三年(一九一〇)に、京都桜橋財団がおそらく旧官家士族の諸氏に送付する目的で作成したと思われる報告書^⑩を、(八)「京都桜橋財団報告書」として紹介する。

(八)「京都桜橋財団報告書」

報告書

本財団ハ明治四十二年八月五日、岩倉宮内大臣ヨリ別紙一号ノ通、大森京都府知事ヘ御沙汰相成候ニ付、知事ハ第貳号ノ通り通知シ、共ニ第参号人名ニ対シ、財団設立ニ関スル事務委員ヲ委嘱セリ、全委員ニ於テハ、第四号寄附行為書^(既ニ送付セリ)を作成シ、全年十一月十九日、京都府庁ヲ経、内務省ニ許可ノ申請ヲ為シ、全年十二月二十五日付許可ヲ受ケ、又宮内省ヨリ全月二十九日付第五号ノ通、下附金ノ御沙汰ニ相成リ、即日整理公債証書額面貳拾万円ノ下附ヲ受ケタリ、右内務省ノ許可及宮内省ノ御下附金ハ、明治四十三年一月四日、京都府知事ヨリ創立委員ヘ伝達セラル、因テ直ニ創立委員水口卓哉、畑道名、小森猷次ハ委員ヲ代表シ、寄附行為第十四條ニ基キ、大森府知事ニ本財団總裁ヲ嘱託スベキ旨ヲ述べ、其承諾ヲ得タリ、全總裁ハ全年一月十日付別紙第六号人名ヲ評議員ニ指名シ、全一月十三日、評議員会開催セ

ラレ、第七号人名ヲ理事ニ選任シ、又第八号人名ヲ監事ニ選挙シ、何レモ承諾セリ、全月十七日、京都桜橋財団設立ノ登記ヲ、京都区裁判所ニ於テ為シ、法人ノ設立ハ全ク完了セリ、其後全年五月三十日、評議員会ニ於テ、別紙第九号ノ諸規程^(寄附行為書ト共ニ送付セリ)ヲ設定セリ、右報告候也、

明治四十三年

京都桜橋財団

第壹号

宮内大臣官房
秘書課 甲第貳九壹号

旧官家士族及旧地下ノ輩御患恤ノ為メ、特ニ整理公債証書額面金貳拾万円下賜ノ思召ニ有之候條、右賜金ヲ元資トシ、財団法人ヲ設立シ、永遠確實ニ之ヲ保存シ、其利子ヲ以テ、賑恤教育等必需ノ費途ニ充テ候様、取計候儀ト相心得、之レニ関スル相当ノ書類ヲ具備シ、申出テラルベシ、

但シ賜金ハ財団法人認可済ノ上交付スベシ、

明治四十二年八月五日

京都府知事 大森鍾一殿

宮内大臣公爵 岩倉具定

第貳号

官秘第壹貳九号

旧官家士族及旧地下ノ輩一同

別紙ノ通り宮内大臣ヨリ被達候條、御旨趣ヲ遵奉シ、速ニ財団法人ヲ組織シ、寄附行為其他相当書類ヲ具備シ、申出ラルベシ、

明治四十二年八月十二日

京都府知事 大森鍾一

第參号

富井 政章	河村讓三郎	谷森 真男
多田 好問	羽倉 信可	藤木 経立
青木 行方	石川 礼興	勢多 章之
伊藤 朝往	畑 道名	水口 卓哉
小森 猷次	六角 敦陳	大町 力
大隅 正経	若杉 保定	浅井 国順
下橋 敬長	井関 次郎	菅谷 寛三
小島秀次郎	伊藤 倫之	左右田忠太郎
岩橋 元柔	松室 信輝	服部 保親
増沢 季的	川口 珍邦	生駒 山国
吉野 久和	下間 頼世	上原芳太郎
嶺 全明	小谷 時中	

明治四十二年八月五日、甲第式九壱号宮内大臣御達ノ旨ニ依リ、財団法人設立ニ関スル準備事務取扱ヲ委嘱ス、

明治四十二年八月十六日

京都府知事 大森鍾一

第四号

京都桜橋財団寄附行為書（既ニ送付済）

第五号

京都桜橋財団

一 整理公債証書額面金貳拾万円

右旧官家士族及旧地下ノ輩御惠恤ノ思召ヲ以テ、其財団資金トシテ下賜候條、教育賑救ノ資ニ充ツベキ旨、御沙汰候事、

明治四十二年拾貳月廿九日

宮内省

第六号

評議員

伊藤 朝往	岩井 義景	岩橋 元柔
六角 敦陳	羽倉 信可	畑 道名
服部 保親	富井 政章	大角 友信
河村讓三郎	吉野 久和	多村 知興
中村 政房	上原芳太郎	山本 長敬
山本 行範	増沢 季的	小森 猷次
小谷 時中	木村 時義	嶺 全明
水口 卓哉	宮原 正喬	三宅 駿吉
莊林 維新	下橋 敬長	多田 好問

青木 行方 石川 礼興 勢多 章之

第七号

理事

岩橋 元柔 六角 敦陳
多田 好問 石川 礼興
山本 長敬 小森 猷次
水口 卓哉

第八号

監事

多村 知興 嶺 全明 莊林 維新

第九号

京都桜橋財団諸規程（寄附行為書ト共ニ送付済）

（八）の「京都桜橋財団報告書」では、最初に財団設立の経緯が説明され、続いてこれに関連する第壹号から第九号の資料が掲載されている。これらのうち第参号の原本は（四）の「桜橋財団設立準備事務委嘱書」、第五号の原本は、（六）の「桜橋財団資金下賜御沙汰書」である。ただし、（四）の原本では桜橋財団設立準備事務を委嘱された人物が三十三名であるにもかかわらず、第参号には富井政章・河村譲三郎の二名の人名が加えられ、三十五名となっている。その理由は不明

であるが、（八）の「京都桜橋財団報告書」は、財団設立後に作成された編纂物という性質上、ここに掲載されている資料には、他にも原本から多少の変更がなされている可能性はあろう。とくに第壹号・第貳号は、『旧桜橋財団関係資料』に収められておらず、原本が確認できないため、取り扱いには注意が必要である。

なお、第四号および第六号から第九号についても、『旧桜橋財団関係資料』には収められていないが、第四号の「京都桜橋財団寄附行為」^①は、京都府立京都学・歴史館に所蔵されている。また、第六号から第八号の人名は、「京都桜橋財団寄附行為」の末尾に「京都桜橋財団役員名簿」評議員」として記載されており、異同もない。そこで、この寄附行為についても、末尾の名簿等を除き、（九）「京都桜橋財団寄附行為」として紹介する。

（九）「京都桜橋財団寄附行為」

（表紙）

明治四十二年十二月二十三日内務大臣許可

京都桜橋財団寄附行為

京都桜橋財団寄附行為

第壹章 名称

第一條 本財団ハ京都桜橋財団ト称ス

第貳章 目的及事業

第二條 本財団ハ明治四十二年八月五日、甲第二九一号宮内大臣ヨリ京都府知事へ御達ノ旨ニ基キ、皇室ノ恩旨ヲ奉戴シ、旧官家士族及旧地下ノ輩、并其子孫ノ賑恤及教育ヲ行ヒ、其幸福ヲ増進スルヲ以テ目的トス、

以下各條ニ於テ旧官家士族ト称スルハ、総テ旧地下ノ輩ヲ包含ス、第三條 本財団ハ前條ノ目的ヲ達スルヲ爲メ、左ノ事業ヲ行フ、

一 旧官家士族并其子弟ニ対シ、奨學資金ヲ貸与又ハ給与スルコト、

二 旧官家士族并其子孫ニシテ、天災又ハ避クヘカラサル事由ニ依リ産ヲ破リ、又ハ家屋ヲ亡失シ、生計困難ヲ来タシタル者ニ、補助トシテ相当資金ヲ貸与又ハ給与スルコト、

三 旧官家士族ノ戸主又ハ家族死亡シタルトキハ、其遺族ニ弔慰金ヲ贈与スルコト、

第三章 事務所

第四條 本財団ノ事務所ハ、京都市上京区今出川通寺町西入常磐井町五百四十三番地ニ置ク、但其出張所を東京市ニ置クコトヲ得、

第四章 資産

第五條 本財団ノ資産ハ、左ニ記載シタルモノヨリ成ル、

一 旧官家士族ニ対シ、皇室ヨリ下賜セラレタル整理公債証書額面金貳拾万円、

二 旧官家士族又ハ旧官家士族ニ縁故アル者ヨリ寄附スル金員、物件、

三 雑収入

四 資産ヨリ生スル果実

第六條 資産ヲ分テ基金及常用金ノ二トス、

第七條 基金ハ皇室恩賜金及費途ノ指定ナキ寄附ノ金員、物件ヲ以テ之ニ充ツ、

基金ヨリ生スル果実ハ、本財団組織完成ノ日ヨリ向フ十ケ年間ハ、其額ノ四分ノ壹ヲ基金ニ編入シ、滿拾ケ年間ヲ経タル後ハ、其額ノ四分ノ壹半、若クハ四分ノ貳ヲ基金ニ編入ス、

第八條 基金ハ国債証券、又ハ確實ナル有価証券ヲ買入レ、若クハ郵便官庁、又ハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ、其利殖ヲ図ルモノトス、基金ハ前項ノ方法ニ依リ利殖ヲ図ル外、他ノ方法ニ依リ之ヲ利殖シ、又ハ之ヲ使用スルコトヲ得ズ、但特別ノ事情アル場合ニハ、評議員会出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ経テ、不動産ヲ買入ル、コトヲ得、

第九條 常用金ハ基金ヨリ生スル果実ニシテ、基金ニ編入シタル残額、及指定ノ寄附金、其他雑収入ヲ以テ之ニ充ツ、

第十條 常用金ハ本財団ノ維持及事業ノ経費、并其目的ヲ遂行スル為ニ支出スルモノトス、

第十一條 毎年度ニ於テ剰余金アルトキハ、基金ニ編入ス、但剰余金ノ半額以内ヲ限り、翌年度ノ常用金ニ繰越スコトヲ得、

第十二條 本財団ノ予算ハ毎年度評議員会ノ議決ヲ経テ、総裁ノ承認ヲ受ケ、決算ハ評議員会ノ認定ヲ経テ、総裁ニ報告スヘシ、

第十三條 本財団ノ事業年度ハ、毎年一月一日ニ始マリ、十二月

三十一日ニ終ル、

第五章 総裁

第拾四條 本財団ハ京都府知事ノ職ニ在ル者ニ総裁ヲ囑託ス、京都府知事ノ職ニ在ル者ニ於テ、前項ノ囑託ヲ承諾セラレザル場合アルトキハ、評議員会ノ議決ニ依リ、旧官家士族ニ最モ縁故深キ名望家ニ囑託ス、

第拾五條 総裁ハ本財団ノ事業及役員ノ職務ヲ監督ス、

第六章 役員

第拾六條 本財団ニ理事七名、監事三名、及評議員三十名ヲ置ク、

第拾七條 理事ハ評議員会ニ於テ、評議員ノ中ヨリ十四名ヲ互選シ、総裁ノ指名選任ヲ請フヘシ、

監事ハ評議員会ニ於テ、評議員ノ内ヨリ三名ヲ互選シ、総裁ノ承認ヲ受クヘシ、

第拾八條 理事ノ中ヨリ総裁ノ特撰ヲ以テ、理事長一名ヲ置ク、

第拾九條 理事長ハ本財団ヲ代表シ、其一切ノ事務ヲ処理ス、理事長事故アルトキハ、総裁ノ指名ニ依リ、理事ノ一名之ニ代リテ其職務ヲ行フ、

第貳拾條 本財団ノ役員ハ任期中ト雖、特別ノ事由アリト認ムルトキハ、総裁之ヲ解任スルコトヲ得、

第貳拾壹條 理事又ハ監事ニ闕員ヲ生シタルトキハ、臨時評議員会ヲ開キ、補闕選舉ヲ行フ、

第貳拾貳條 評議員ハ第二條ニ掲ケタル者ニシテ、戸主タル者ノ中ヨリ、総裁之ヲ指名ス、

第貳拾三條 評議員ニ闕員ヲ生シタルトキハ、総裁ハ遲滞ナク補闕員ヲ指名スルモノトス、

第貳拾四條 役員ノ任期ハ凡テ四年トス、但重任ヲ妨ケス、

第貳拾五條 理事、監事又ハ評議員ノ補闕者ノ任期ハ、各其前任者ノ残任期間トス、

第貳拾六條 役員ノ任期満了ノ場合ニ於テハ、其後任者ノ就職スルマテハ、仍ホ前任者ニ於テ、其職務ヲ行フモノトス、

第貳拾七條 役員ニハ給料ヲ支給セズ、但理事ニハ相当ノ報酬ヲ贈与スルコトヲ得、

第貳拾八條 本財団ニ書記若干名ヲ置クコトヲ得、但相当ノ給料ヲ給与ス、

第七章 評議員会

第貳拾九條 評議員会ハ毎年一回之ヲ開キ、理事長之ヲ京都市ニ招集ス、其他理事長ニ於テ必要ト認ムルトキハ、臨時之ヲ招集スルコトヲ得、

監事又ハ評議員四分ノ一以上ヨリ、會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求ヲ為シタルトキハ、臨時評議員会ヲ開クコトヲ要ス、

第三拾條 評議員会ノ会長ハ評議員会ニ於テ、毎会評議員中ヨリ互選スルモノトス、但此場合ニ於テハ、年長者ヲ以テ仮ニ会長トシ、其選舉ヲ行フ、

第三拾壹條 評議員会ニ於テ選舉ヲ行フトキハ、投票ノ過半数ヲ得タル者ヲ以テ當選者トス、過半数ヲ得タル者ナキトキハ、最多數ヲ得ル者二名ヲ取り、之レニ就キ投票セシム、若最多數ヲ得ルモノ

三名以上同数ナルトキハ、会長抽籤シテ其二名ヲ取り、更ニ投票セシム、此再投票ニ於テ猶過半数ヲ得ルモノナキトキハ、抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム、

前項ノ選舉ニハ、評議員会ノ議決ヲ以テ指名選舉ノ法ヲ用フルコトヲ得、

第三拾貳條 評議員会ノ議事ハ、過半数ヲ以テ之ヲ決ス、可否同数ナルトキハ、会長ノ決スル所ニ依ル、但シ理事タル評議員ハ、決算ノ認定ニ就キ議決ヲ為ス場合ニ於テハ、表決ノ数ニ加ハルコトヲ得ス、

第三拾三條 評議員会ハ、評議員半数以上出席スルニ非ラザレバ、議事ヲ開クコトヲ得ス、但シ同一事項ニ就キ再度招集ノ場合ニ於テハ、評議員三分ノ一以上ノ出席ニヨリ之ヲ開クコトヲ得、

第三拾四條 總裁ハ評議員会ニ出席シ、意見ヲ述ブルコトヲ得、但表決ノ数ニ加ハルコトヲ得ズ、

第八章 附則

第三拾五條 本財団ノ事業施行ニ関スル規則ハ、評議員会ノ議決ヲ經テ別ニ之ヲ定メ、總裁ノ承認ヲ受クルモノトス、

第三拾六條 將來此寄附行為ノ條項ヲ變更セントスル場合ニ於テハ、評議員三分ノ二以上出席シ、其出席者總數ノ四分三以上ノ同意ヲ經テ、總裁ノ承認ヲ得、且主務官庁ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス、但第貳條、第七條第一項、第三拾七條、及第三拾八條ノ規程ハ、之ヲ變更スルコトヲ得ズ、

第三拾七條 本財団ハ法定ノ解散事由發生シタル場合ノ外、解散スル

コト無シ、

第三拾八條 本財団解散ノ場合ニ於ケル資産ノ処分ハ、左ノ歩合ニ依リ之ヲ分配スルモノトス、

一 宮闕ニ直接奉仕ノ資格ヲ有セシモノニシテ、士族ニ列セララレタルモノニ對シテハ、各百分四十、

但諸家侍以上ノ資格ヲ有セシモノヲ包含ス、

二 諸家ノ家來タル資格ヲ有セシモノニシテ、士族ニ列セラレタルモノニ對シテハ、各百分ノ三十、

三 宮闕ニ直接奉仕ノ資格ヲ有セシモノニシテ、明治五年正月太政官達第二十九号ニ依リ、士族ニ列セラレタルモノニ對シテハ、各百分ノ二十、

四 諸家ノ家來タル資格ヲ有セシモノニシテ、明治五年太政官達第二十九号ニ依リ、士族ニ列セラレタルモノニ對シテハ、各百分ノ十、

旧官家士族ノ資格ヲ有セシモノニシテ、一旦帰農帰商シタルモノモ、亦其資格ニ依リ前各号相当ノ歩合ニ依ル、

第三拾九條 旧官家士族タル資格ニ関シ、疑義ヲ生ジタルトキハ、評議員会ノ議ニ附シ、總裁ノ承認ヲ得テ之ヲ決定ス、

第四拾條 旧官家士族ニシテ、第三拾八條ニ規定セル資格ヲ有スルモノ、其氏名ヲ改稱シ、其身分上ニ異動ヲ生ジタルトキ、又ハ住所ヲ變更シタルトキハ、本財団ニ其旨ニ届出ツベシ、

第四拾壹條 本寄附行為ノ認可後、法人組織ノ完成スルマデノ事務ハ、京都府知事ニ其処理ヲ委託ス、

第四拾弐條、本財団設立ニ関スル費用ハ、常用金ヨリ之レヲ支出スルコトヲ得、

以上、本稿で紹介した(一)から(九)の史料に基づき、明治四十二年前後における京都桜橋財団の設立過程を整理しておきたい。

先述のとおり、京都桜橋財団の設立に向けた動きは、明治三十四年(二九〇一)以前から見られるが、(一)の「京都府知事大森鍾一宛宮内大臣官房総務課第一七〇号」によると、少なくとも明治四十年(二九〇七)十二月三日の宮内大臣田中光顯への内申により詮議は開始されていた。そうした状況のなか、宮内大臣官房総務課より、官家士族の範囲や総称などについての質問が、明治四十一年(一九〇八)五月二十日になされる。これに対して、(二)の「宮内大臣官房総務課長近藤久敬宛京都府知事大森鍾一回答案伺」では、官家士族の範囲については、(三)の「地下官人階級調」等を添付し、ここに記載された計千四百六十二家とその範囲であり、官家士族の総称については、「旧官家士族及旧地下ノ輩」が相応しいと、回答する案を示している。

(七)の「多田好問京都出張日記」の明治四十二年(一九〇九)三月の記述には、「昨年以來屢御内談ニ及ヒ置タル宮内省ヨリ旧官家士族へ御下賜金之儀ニ付、今回宮内大臣ヨリ御内意之趣旨ヲ伝ヘラレタル」とあり、この頃には宮内省より京都府知事大森鍾一に、下賜金についての内意が伝えられていたことが分かる。また、大森知事は、同年二月中旬より病氣療養中であつた宮内省御用掛の多田好問に、東京在住の官家士族に対する宮内大臣の内意論達を依頼している。

(八)の「京都桜橋財団報告書」の第弐号・第弐号は、原本を確認できないものの、これらを信ずるならば、明治四十二年八月五日に、

宮内大臣岩倉具定が大森知事に対して、二十万円の下賜を前提に、財団法人の設立とその申請準備を命じ、明治四十二年八月十二日には、大森知事が旧官家士族及旧地下ノ輩一同に対して、財団法人の設立と寄附行為等の準備を命じたようである。また、明治四十二年八月十六日には、(四)の「桜橋財団設立準備事務委嘱書」により、大森知事が多田好問を含む三十三名に対して、財団設立準備事務を委嘱している。

(七)の「多田好問京都出張日記」の明治四十二年八月の記述にも、大森知事が療養中の多田に京都出張を命じ、他の官家士族とともに京都府庁において、宮内大臣御達の趣旨を伝達し、財団設立準備事務を委嘱したとある。また、多田は座長として他の準備事務員と寄附行為案を討議し、修正案を大森知事に答申したり、知事らと財団設立の要件を協議したりと任務を遂行し、帰京後には在東京の仮事務所を谷森真男宅に決定している。同年九月から十一月にかけても、多田はたびたび京都に出張し、官家士族の範囲や、内務大臣への財団設立出願手続きについて協議するとともに、寄附行為修正案の再議、旧官家士族の名簿調製などにも尽力したのである。なお、(八)の「京都桜橋財団報告書」には、「全年十一月十九日、京都府庁ヲ經、内務省ニ許可ノ申請ヲ為シ」とある。

(五)の「宮内書記官栗原広太宛京都府知事大森鍾一書翰案」のとおりに、雑掌等の処遇についてもあらためて検討がなされており、民籍に移籍した者を除いて、彼らを官家士族に包含するのが妥当との判断

が下され、明治四十二年十二月二十三日には、その調査結果を大森知事が宮内書記官栗原広太宛に提出している。また、(九)の「京都桜橋財団寄附行為」の表紙によると、同日にこの寄附行為が内務大臣により許可されたことが確認できる。なお、(八)の「京都桜橋財団報告書」には、「(内務省より) 全年十二月二十五日付許可ヲ受ケ」とある。

こうして明治四十二年十二月二十九日に、(六)の「桜橋財団資金下賜御沙汰書」が宮内省より京都桜橋財団に下され、旧官家士族及旧地下ノ輩」の教育賑救の原資として、二十万円が下賜されたのである。

なお、(八)の「京都桜橋財団報告書」によると、明治四十三年(一九一〇)一月には、大森知事に財団の総裁を囑託し、評議員が指名され、評議員会で理事の選任と監事の選挙がなされるとともに、京都区裁判所に財団を登記して、法人の設立が完了したと報告されている^①。

最後に(九)の「京都桜橋財団寄附行為」により、京都桜橋財団の性質についても考察しておきたい。「皇室ノ恩旨ヲ奉戴シ、旧官家士族及旧地下ノ輩、并其子孫ノ賑恤及教育ヲ行ヒ、其幸福ヲ増進スル」とが、桜橋財団の目的であると第二條で規定されており、この点については平安義会との大きな違いは見られない。ただし、平安義会が山城国内に居住している官家士族に会員の範囲を限定しているのに対し、桜橋財団は「各條ニ於テ旧官家士族ト称スルハ、総テ旧地下ノ輩ヲ包含ス」と記されているのみで、会員の範囲を限定していない。事務所について規定した第四條に、「但其出張所を東京市ニ置クコトヲ得」とあることから分かるように、桜橋財団は山城国内に限らず、旧地下ノ輩を含む全国の旧官家士族を賑恤の対象としている点に特徴がある。

なお、事務所の住所は「京都市上京区今出川通寺町西入常盤井町五百四十三番地」で、平安義会とまったく同じである。すでに平安義会が事務所を置いていた旧二条邸の一角に、桜橋財団が事務所を間借りしたものと考えられる。

また、平安義会が代表として、「本会ニ特ニ功勞アル人ノ中」より会長を置くのに対して、桜橋財団には、財団の事業や役員の職務を監督する立場として総裁が置かれ、「京都府知事ノ職ニ在ル者ニ総裁ヲ囑託ス」と第拾四條に規定されている。これに基づき、京都府知事の大森鍾一が初代総裁を囑託されたのである。

つぎに第三條には、桜橋財団の事業が規定されており、これらのうち「旧官家士族并其子弟ニ対シ、奨学資金ヲ貸与又ハ給与スルコト」については、平安義会の事業とほぼ同じである。ただし、これに続けて「旧官家士族并其子孫ニシテ、天災又ハ避クヘカラサル事由ニ依リ産ヲ破リ、又ハ家屋ヲ亡失シ、生計困難ヲ来タシタル者ニ、補助トシテ相当資金ヲ貸与又ハ給与スルコト」「旧官家士族ノ戸主又ハ家族死亡シタルトキハ、其遺族ニ弔慰金ヲ贈与スルコト」が事業と定められており、これらも桜橋財団の特徴といえる。尾崎三良が桜橋財団について、『尾崎三良自叙略伝』のなかで「是は官家士族の困窮せしものを賑恤する為めに帝室より下賜なりたる二十万円を基本として設立せしもの」「官家士族子弟の教育費を補助し、傍ら同鰥寡孤独を救恤するの資金と為せり」と述べているとおり、官家士族とその子弟に対する教育支援にとどまらず、困窮者の賑恤や鰥寡孤独の救恤をその目的に加えている点が、京都桜橋財団の性質を考えるうえで重要である。

注

- (1) すでに、「平安義会沿革概略」の翻刻と官家士族の先行研究―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二四、二〇一七年)、「由緒沿革誌其ノ四」の翻刻と平安義校―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(二)―(『駒沢女子大学研究紀要』二五、二〇一八年)、「由緒沿革誌其ノ一」の翻刻と平安義会の沿革―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(三)―(『駒沢女子大学研究紀要』二六、二〇一九年)、「由緒沿革誌其ノ二」の翻刻と平安義会への授産金引継―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(四)―(『駒沢女子大学研究紀要』二七、二〇二〇年)、「由緒沿革誌其ノ二」の翻刻と平安義会の社団法人化―『平安義会資料』『旧桜橋財団関係資料』の紹介(五)―(『駒沢女子大学研究紀要』二八、二〇二一年)を発表している。あわせて参照されたい。
- (2) 詳細は注(1) 拙稿(二〇一七)を参照のこと。
- (3) 松田敬之「明治・大正期 京都官家士族の動向に関する一考察―華族取立運動と復位請願運動を中心に―」(『京都産業大学日本文学研究所紀要』六、二〇〇一年)。
- (4) 注(1) 拙稿(二〇一七)。
- (5) 『尾崎三良自叙略伝 上巻』(中央公論社、一九七六年)。
- (6) 厳密にいうと、表書きに「委嘱書」、裏書きに「京都府知事大森鍾一」と記された封筒に収められ、表書きに「御沙汰書 委嘱書」

と記され、裏書きに「京都市今出川通寺町西入 京都桜橋財団事務所」の印が押された封筒に、(六)の「桜橋財団資金下賜御沙汰書」とともに入れられている。

- (7) 『官報』第七一八二号(明治四十年六月十日)に、「宮内省御用掛被仰付 従四位勲三等 多田好問」とある。

- (8) 『尾崎三良自叙略伝 下巻』(中央公論社、一九七七年)。

- (9) 伊藤隆・尾崎春盛編『尾崎三良日記 下巻』(中央公論社、一九九二年)。

- (10) 京都府立京都学・歴史館所蔵『若杉家文書』文書番号二三三八「京都桜橋財団報告書」。

- (11) 『京都桜橋財団寄附行為』(京都桜橋財団、一九〇九年)。なお、同資料はまれに古書店で取り引きされることもある。

- (12) 注(5)『尾崎三良自叙略伝 上巻』の「桜橋団のこと」の項には、「桜橋団の事は水口卓哉、畑道名、岩橋元柔、服部保親外数名、多年東西に奔走し其筋へ請願し、予も亦始終其間に在つて斡旋し、十数年の後渡辺宮内大臣の時、漸く此結果を得たるのみ」とあるが、渡辺千秋の宮内大臣就任は明治四十三年四月一日であるので、この点も後年の尾崎三良による誤解と考えられる。なお、京都桜橋財団設立への動きがもつとも活発であった、明治四十二年八月から明治四十三年一月に至る期間の宮内大臣は、明治十二年(一八七九)の三万円の下賜をはじめ、官家士族の救済に尽力した岩倉具視の子息岩倉具定である。官家士族への二十万円の下賜がこの期間に実現した背景には、こうした事情も想定できよう。

